

和定編

田節輯

開明

小説

春

雨

文

庫

第三號

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

A416
1

春雨文庫第三編卷之下

東京

松村春輔 閱
和田定節 著

第十回

お岩いわの清兵衛せいべいの顔かほを覗のぞきことと貴君あまごりうりう一ひとつつああい
 んいんるるよよいいまませせんんうう一ひと左様さやうささ次つぎでで貫ぬきををううりりるるアア何なんどどり
 長文句ながぶんくの手紙てがみでで以上いじょうかかととがが付つ宿しゆくへへいいちち商賣しょうばいちちががひひななと
 ととああちちややアア外ほかねねどど清水しみずのの月照げんせうささままももおお経きやうをを讀よみででおお在い

48-7524

るされむ何のといふののふ攘夷どとら鎖港どと
らで氣を揉まるところく海の中へ身を投てか死去
るされどとのと「まへまアお氣の毒さまる 訳平
野さんも黒田さんへお名一捕ふ成とのどと「三平
まア「何ふしろ讀で仕まをうア「然れども旧
藩の事由互朋友の中ふ同志の者の無又あつねが
竊ふ此書と認むるを得たれを君も呈して今日
の失策を告ぐ僕は是より福岡へ引れ函閉さるるに相

春雨三下

違ふ一尤も此度の同志薩藩有馬新七以下への既
小一封を贈りたれを僕が今日の危難の知りぬべ
因りて西郷君山田君などの人々よ面會あらん日僕
が成行を宜しく諸君又話一下されと云々と有
りけれむ清兵衛のいよく以て黙然とつり一が暫時あ
つと苦竹大ひる一諸藩の人達がおよびもせぬと
ふ氣を揉ま攘夷どの鎖港どのと騒いどつて何様
るるりのり嗚呼とあ蔭で美味雑炊を固まら

して仕まつるア

島津泉州の東武に至らんとして播州姫路へ着あ

りし平野次郎巨魁となり有馬新七以下二百

餘人の浪士を率ひ其旅館へ推参して言ふ我輩ら

錦旗の魁して大坂二條彦根の三城を同時みせめ

取り令と七道の諸藩み下し皇駕と東國みさ

しらせ幕府を追ひ攘夷の功と速み遂んと欲

す臣ら微意を憫れと此事を以て君侯より至

春雨三下二

急不上奏し給をんと願ふとるりけれを泉州不

の渠らげ暴拳の止む可からざるを察し浪士一同

と相俱し伏見まで至りし京師の騒動大か

みならず時不泉州の浪士らと伏見止めなき上京

ありて天下の景勢と演説ありし浪士の支を

上申し平野二郎より差出したるところの書一通を

呈し御指令の程を待ち居り然るは薩州の脱士

有馬新七橋口壯助同傳蔵田中謙助弟子九龍助柴

山愛次郎森山新五左工門らを泉州の所置因循る
りとして伏見を發足し京師に迫らんとなしける故
泉州驚き隨従より来りし臣下のうち奈良原喜
八郎大山綱良らをして伏見へ遣りこれを止めて諭せ
ども聽ず遂に争論を發し鬪ひを交るに至り有
馬新七以下の奈良原大山とりの為に尽く討たる
され先その事の事ハ濟とるあり
此ころ京師の時にて神社の札の天より降り下る

とのみと始まり何屋の家への出雲の大社のお札がふ
り誰さんの家へも出雲の大社のお札が降りて何
屋の息子と誰さんの娘とい夫婦なるは違ひない
縁結びの神さうなのお札が両方へ降りこのごりのヲと
一人が言へば一人が又言ふ先計町の伊勢屋の家へ大
神宮さうなのお札が降りて息子の錢づりひの尻がこ
れお拂ひ箱も成ておまひ祇園町の魚屋の見世の先
へ西の宮の惠比須さまのお札が降りて其処の家の

親翁の大きう釣が好きよ成ととりあてまゝ中白山の
依屋と言ふ本屋への辨天さうなのお札が降てから亭
主の藝子が好きよあり祇園町で生と辨天さうなごと
評判とされる小常と言ふ藝子ふをまり込んで仕舞
ととりあ話しき「オヤ」左様してつんと江戸の城への
外國の天帝のお札でも降とので関東の役人の外國
人おをめられて仕舞とのりも知れんこといふア

諸神社の神符降るとい此後慶應三年の秋ふ至

り京師近傍摂州へん及び東海道すちみまで廣が
り一般よ是と言ひやせり思ふよ又文久の末より
此事ちとづ有りとるう

「儀屋」とい本屋の勤王家で薩州や長州や其外の諸
浪人が出這りして関東と押し潰し外國人と追むら
ふ目算として居る人ごとくみやア移るう「其様なこ
とア何ぞり知ら移るが劍術も出来本も讀てあつてい者
ごとと言ふ話しの變て居る「何でも所司代や町奉行

清兵衛妹
阿らく

辻占の
船遊び
とよの
春は
とち



清兵衛妻
於岩

春雨三下五

でも附て居ると見え目明共が陰より陽より
探索とする様子ど「自己の朋友の終屋とつゝのが俵屋
の末社で始まり出這りとして居るがその男の話―が
やア勤王どころり小常又をまり込先計町の藤村と
り家へむりり往て居るさうど道往く人の高声が
耳小這入れを清兵衛の女房お岩と清兵衛の妹お楽
ハ顔と見え合せ目で知らせ後小附き往る程多く二人
ハ傍の家へ入りりり茲又於てお岩とお楽ハ互ひ

ふあつと溜息つき「姉さん今の話」とお嘆きするす
つとろ岩「あまーとが僅り五丁り七丁の道と歩行ま
ふも彼様る噂の噂へるい真も苦勞でございますね
つあん又兄さんと考へ事、徳坊や庄坊のあるうへ
慈母さんや私まで姉さんお一人お押附ておき並の
人の固る時分又祇園町の小常とやらお欺ざれ先計
町の藤村とやら家へ通ひ無多なるお金と遣ふのころ
姉さんの様る善いお人お苦勞とお為せ申すので慈

母さんも實にお氣の毒とて居りますますと
小常とやらが悪くつて憎くつて扱つてやりとら
いますワ一寸買りのよ出てさ人今の様る話と噂の
から

お樂い清兵衛の妹今年二十よりして眉目かちち美
まのそらならず糸竹の道お蘭け心ざまも優く母ま
と兄お仕へて孝なれえ兄姫も中心やりなりお樂が
身の上も亦一奇談あり并い追々お説き出すを

こゝで知りさぬへうー

お岩ツルの四邊見まへして声こゑを竊ひそめ「い、エお楽らくさん左様さやう

下したい多おほい小常こつゆお現うらを救ぬかへこの世間せけんをつつと表あらわす

き先刻さつきも平野ひらのさんうら来きと手紙てがみと流ながるさう

口の先さきで困こまつて馬鹿ばかる人とちどるぞと悪わるく言いてい

お在いどけと私わたしお柱はしらさなや村田むらたさ々の内容ごやうす子こ

言いひ何様なんやうも勤王きんおうとやらのお仲間なかつまで今いまの人の話はなしして

言いととつり所司しよし代様しろやうやお町奉行まちぶきやうで人ひとをまへにごせんは穿せん

議ぎとるさるのが実正みんしょうでいりと思おもえれ苦勞くらうでく

監かんえ出すと夜よも平ひらおの眠ねられませんそれ先刻さつきも嶋しま

津和泉つわいづさまとつりよお方かた浪人なみのり者を連つれて京都きょうとへお

込こむとの話はなしと受うけ二日ふたひ酔よで氣きえよく何分なんぶん能よい

う鶏卵とまごの雑炊あじやで勢いきひが附つとから世間せけんの模様りやうをつんて

来こやう兎角とくかく商人あきうりの損徳そんとくはううううと時ときおあるとうら言いて其

処こゝへ出でておいぞ有あつと去年きょねんあつりわりの容やう子す

何様なんやうも只事ただごとでい無なうと思おもえれまそれとつり人ひとを小

常の事と言ても私もの何様も然し思へれまの併
慈母さん此様なととなせや一去年寄みお乳を
お揉せや一悪いか慈母さん極の内証で座
いま左様おつちやれが私実の怪しく疑つ
居るのでございます何程小常が狐でも人異見と言
ふと又年ふれて餘りな化ささうと開いて藝子なん
ぞ又没つて居る人を思ふ何方う浮れて居ますけれ
ど兄さんの何時でも苦い顔をして心は苦勞の有り

けみ容子お姉さんの此様とありうも知れませんが若左
様どつとマア大變ぢやアは坐いませんと二人が眞の
話しも知らず向ふより来り大勢がソレ軍とく彼様
り年増と戦ひてへなアと言れて二人は怖れれば矢玉
と擔ぎとる人足る故備はさの軍の支度と思ふ
より先胸おどろ二人の急ぎ道とよけ傍へ寄れを又後
から馬へ乗りとる士がハイ

第十一回

箱根ナア八里の馬下も越すがト戯場ふらゆのせし權八
の出端あり鈴が森なれども夫よりずらんと神奈川の
方へよりくる海の端よせ来る波の岸辺あり松吹く風
と音凄く月の有りても三日四日の足しをき光り山の
端へ入り相過し火燈しころ往來の絶て寂漠たる生麥
の松原と神奈川の方より十七八と思しき娘が息を切
らし足元まどろみ駈て来る後より踏の音高く外國
人が追ひつけ来り八町繩手の中ころで娘も追ひつき

春雨三下九

後方より帯の結ひめと引とく人「貴嬢助へえありま
すりと言ふのを訊り餘の言葉はとハア」とキンカン娘
の鷹も振まれし雀の如くし身を縮めアとキとキと戦
慄ふらんそのまゝ其処に立ちすくむ脊中の方より手と
まへへ外に人の娘を抱き猶も「ハア」口元み凝をたら
し目尻と下げ恍惚とせし顔つきは口説て直に横濱
の我が館内へ連れぬらん心ありとぞ知られける然れ
ど娘の逃たとして彼が思ふに任せねば怒りの餘り手

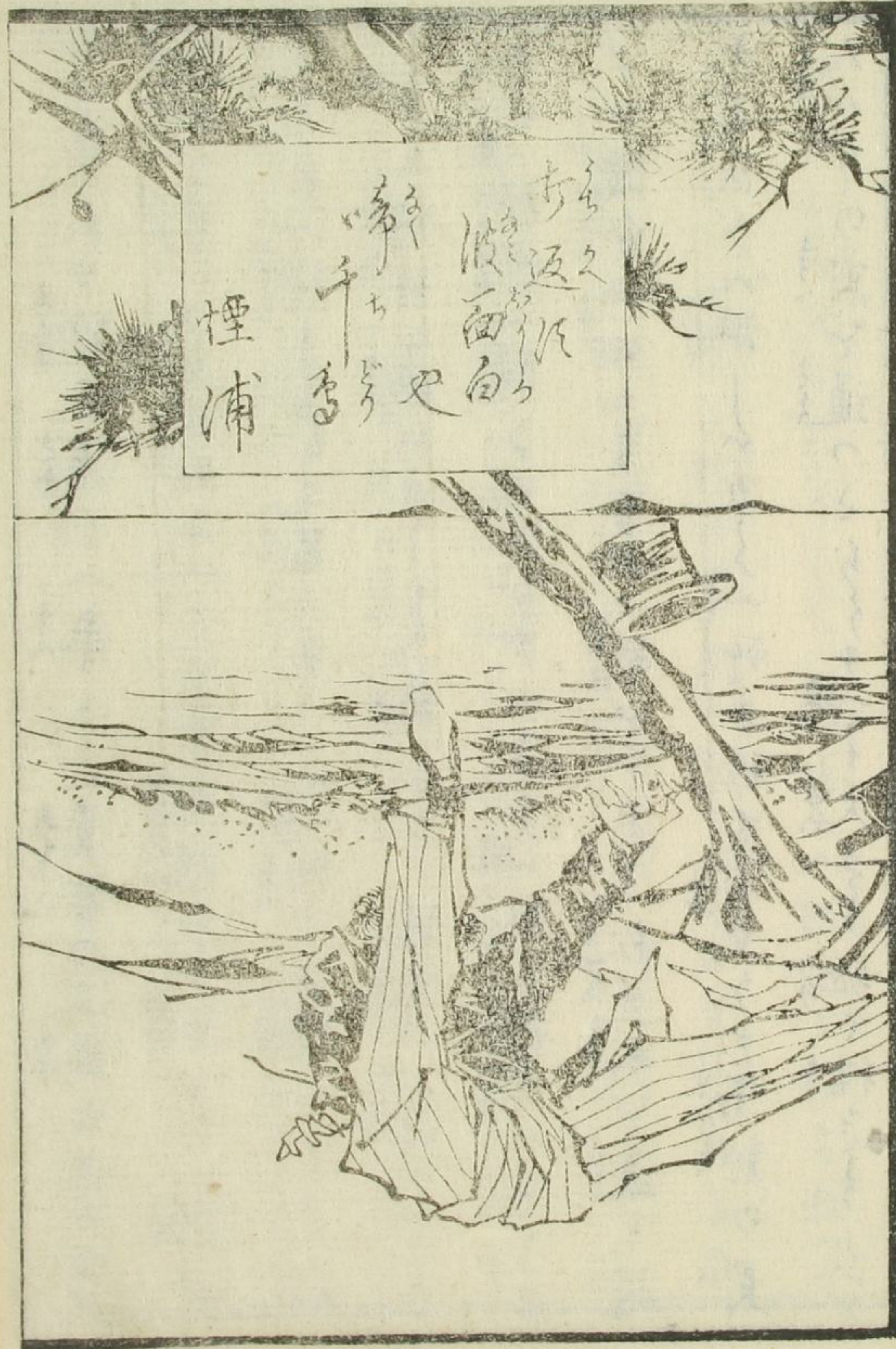
短う本意を遂ん心よりいふ言ひる
娘の手を取り傍る松の木蔭へ引きずつて往
んとするを性まどと争ふそのりく女の方何様せん
方もなくを折る此処へ来る人二年も苦さ
侍の袴羽織も大小を差せしと見るさ人灰暗き立
止りて窺ふ此方の模様と見るあんな娘ハ早く声
を掛け「其処へお出ぬ何方様存りませんか外国人ハ
捕まると難儀とするのにお助けなすうて下さるまし

春雨三下十

お願ひでございませうと云れて点頭武士ハ二人の側へツク
より「何と妹ぢやア祐へ何様とぞハイ。外国人ハ武
士に向ひ頭と左右へあり「貴君へく彼の武士ハ何ふも
言はず外国人の利腕とらつて娘を突きおはし二人が中
へ割り入りながら娘に向ひ「お前ハ早く逃て仕まひる
娘ハ夫でも貴君を「ア宜しく急き立られ娘ハ元来一
道のみく人暗きと紛れ逃往きより外ハ人の是を見く
「アアと怒り不堪ぬ声りろともみ足を揚げ彼の武

士と蹴久せを武士とやく身をかたし暗きまがらも
術有る、彼方此方へ除くししが異人のますく猛りそ
止むを言面倒ると言なぐう苛つて蹴つける外必人
の踵を右手で確り取りカまうせて反う人せば外国人
の仰おけよけし飛び倒れてハアア侍の猶驚しそ呉
んと刀ふ及りうち援けられを白刃の光りふますく
仰天起も上らず這ひずりまぐう周章ふとあき逃げ
往きと若侍の口のうち「稍もする」と外必の奴らぐ

若い女とつゝまうて悪いととは様とするふやア困りま
る成る程蹴るのなまぐうカどか身體ふ合せると思
ひの外は弱いのどし私語まぐうぐうし此侍も神
奈川の方へむくひて三四丁来ると傍の出茶屋の蔭よ
り目し只今の難有うでさいましと本蔭さぬでト言ひまか
ら腰と屈めて立出るの前不逃せし娘なれや武士の振
り向きつて用やこの淋しいのふふ前へまど此様るところ
ふふ在のう淋しくつて怖くつて齒の根もろくふふ合



ひませんが餘り遠くへ参ると貴君のお出るさりのが
知れませんが此処ふつぐある先程のお礼と申上げ
とさよお待まりして居りますと何のお禮どころか彼
さま儀理の固い丹してお前さんの何地の方へお入り
のど横濱へ帰るのでございますと私も横濱へ帰るの
どが随分此処うぢやア骨がとれる松並木を通り越
すあひどの淋しいところ一所に往て上やうが先刻の異
人への前を通つとらう子大さう駈て往きまうとが

亦捕まるハト胸りたまうと何様への訳どう知らねが
待ふせよして居る程の事ゆをらう何よも訳のあるの
ぢやアございませんと何みても早く往う私の後へ附て
おいてまう直其処が子安村どが先頃ツから見ると大
う暗く成と思つとら雲が出て来ると今朝の地震と
言ひ何様やら雨よりさうど仰向く顔へびりちりト
當るよ驚ろさアヤア空然噂も出来ねへまう降て
来と娘の妻さぬやでございませぬと何のお前さん

が降せやアおめ人ー娘それ「夫でも吾侪をお助け下さるので
両手取れ雨ふお逢ふさるのでございませう侍
前さんの事お関係おん人くくと言て何様して降り
出さねへうちに横濱まで帰れるもの何みしてもまう
四五丁往やア心易い家が有るくく沢山遣つて来ぬ人
うちよ其処まで急ぎやせう「夫でい一所と思われ
るいやりよ離れてお後々々参りますくく何卒お願ひ
申すまう侍この暗さ下の男く女く分らぬ人くく双んぶ

歩行ても宜い遠慮おやア及びやせん「お礼がやー上
さ小お侍やしてとり却つて亦お世話さぬよあり難有
うございませう「何の脊負でも仕やアおめ人ー自分こ
こお徒歩で往くのどの世話どころの話ーぢやね
へ只厄介なの此雨どるく遺りして来とと言ふるもあ
らぬよ又トツと下降り強く来る故こりやア終終併直其處
ど私の後く急いでおいでと言ひつ袴と摘と上げ駈れば娘
も足も早め往く程るく茅草の家の擔端へつと這入

後見^あ久^とりて^{さむらひ}武士^{まへ}の^{まへ}お前^{まへ}さん^もま^の家^{うち}で^{こゝろ}私^{わが}と^し二^{ふた}所^{ところ}は^あ雨^{あめ}
を^{やま}罷^{くだ}せる^らう^そ夫^{それ}で^みそ^のり^やア^あ降^ふられ^る支^し度^どで^いお^で出^いる^せん^と
声^{こゝ}か^けみ^ぐら^う入^いり^の口^{くち}の^{あま}雨^{あめ}戸^どと^が瓦^{がら}落^ら裡^りひ^き明^あけ^て一^{いち}老^{らう}母^ぼ
ア^う内^{うち}は^あ居^ゐる^う生^{なま}麥^{むぎ}の^ま松^{まつ}原^{はら}と^が外^{とが}れ^ると^り降^ふて^き来^きと^ので
此^{こゝ}様^{さま}は^ぬ濡^ぬて^し仕^しま^うと^アと^い言^いふ^{こゝ}声^{こゝ}は^きき^つけ^ぬ奥^{おく}の^{かた}方^{ほう}より
六^む十^{じゅう}む^むら^うの^む女^{むすめ}が^た立^た出^でて^おオ^オヤ^ヤマ^マア^ア若^わ且^{かつ}那^な江^え戸^どの^{うち}お^お家^かへ^いら^う
ま^まや^つと^おな^な歸^{かへ}り^がけ^では^お坐^まい^ます^のう^エ开^ひて^お連^つぎ^な
が^ある^でい^はな^いま^せん^う一^{いち}左^さ様^{さま}ハ^{なま}生^{なま}麥^{むぎ}の^ま松^{まつ}原^{はら}で^あ妙^{たえ}な^こひ

か^ひら^ひ一^{いち}所^{ところ}は^なぬ^のこ^こま^まア^あ上^あへ^てか^ら緩^{ゆる}り^話ら^う後^{あと}より
久^くり^りア^あお^お前^{まへ}さん^{こゝ}此^{こゝ}手^て拭^{ぬぐ}で^あ足^{あし}を^うら^うて^こ此^{こゝ}方^{ほう}へ^あ上^あん^る
せ^きへ^き究^{きゅう}屈^{くつ}る^{もの}者^{もの}の^お居^ゐる^う家^かは^おホ^ホニ^に貴^き嬢^{ぢやう}汚^{よご}穢^せと^ころ^では
坐^まい^ます^うア^あが^あ上^あん^るす^うて^か下^{くだ}さ^いま^し一^{いち}ナ^なハ^は難^{がた}有^あら^うご^さい^け外^{がわ}
是^{こゝ}より^{さむらひ}武^ぶ士^しの^う上^{かみ}へ^あが^り次^{つぎ}の^ま居^ゐる^うの^お囲^い爐^ろ裡^りの^{そば}側^{わき}へ^い往^ゆて^ま居^ま
娘^{むすめ}も^お囲^い爐^ろ裡^りに^あわ^らせ^らる^ら生^{なま}麥^{むぎ}の^ま一^{いち}伍^ご一^{いち}付^つを^{らう}老^{らう}
婆^{おば}不^ふ話^わす^らう^ち老^{らう}婆^{おば}の^{ちや}茶^{ちや}と^い入^いれ^ひ餅^{もち}と^い焼^{やく}て^い出^いす^い
二^{ふた}月^{げつ}末^{まつ}の^よ餘^よ寒^{さむ}の^{こゝろ}あり^{むすめ}娘^{むすめ}の^{しじゆ}始^{はじ}終^{しゆう}氣^きの^な主^{ぬし}母^ぼさ^うう^え燈^{あかり}

ぐらき方へ顔を向けろと尻込とて口さう人をまき
と利得れりのと知りとまへ

老隣 外国人の女ふかると耻ぢ外咄も思はず夢中なる

ので折々今の様る間違ひが突るのでは危いもう待て

とりやア往ねへ追々雨どれの音が強く成て来と降

り出しが悪いら何瀬今夜の動けません言ひみり

娘は對ひお家でお案するさのませうが加駕籠とや

ても此処らあるお送りす人を恃んでの上ませ

うが今から濱迄の實は大変汚穢くつても宜しけれ泊

つて夜が明とあり直ふお帰んるさのまら子若旦那の

ぶが好でい内坐いませんう左様さこの雨ぢやア実ふ

仙方が移るうのう夫とも泊つては悪いら何ど娘

吾儕の家の江戸で吉田町の松下亭と申す料理屋が縁

家由る手傳るう泊りよ参ッて居るのでは危いませ

江戸の母々浦島の観音様のお札と戴き贈てよとせと

来まるとり今日お札と戴きよ参り外折々松下亭へ来て



濡衣ぬれのいろ増しは
 色いろ多おほかり
 のいろは梅うめ

標め壇だん

悪あくふさげと為なる異人いじんふ逢あひ否いなやありませんく横濱よこはまの方かたへ参まゐ
 らず江戸えどの屋やへ逃のがれて隠かくれやうと志こころましく追おうけて来きて捕とらへら
 れまゝこので座ざいますが松下亭まつしたていで直すま江戸えどへ参まゐ
 つゝ事ことと思おもつて居ゐりませうく案あんど致いたしますま
 が西さい介けいと掛かまりてい老らを何なんのサさ西さい介けい事ことの有ありま
 せんお泊とまらんすつても宜よろと極たまつゝ私わたしの方かたも此こゝ願ねが
 ひがあります。モ且かつ那なエ彼かの遠とほくで鐘かねの音ねの致いた
 ます村むらの婆おばアさん達たちが寄よての百ひや万まん遍へん爺ぢや川崎かわさきまふ

往ゆきまゝこのどうり程ほどある帰かへつて来きませうが其間そのまひだも二
人にで留守留守とて居ゐて戴おほきと坐まさの方ほうへ床とこの
敷いて往ゆきますう侍ざうら道具どうぐどてせへ仕して往ゆきて呉くれりやア
何ど処こへやも往ゆきがけの婆ばあ邂逅まじりのお客きやくどとさうの往ゆき
ませんけれどまア免めんるさいと奥おくの坐まさ人ひと寐床ねとこと
の留守留守と二人ふたりの侍ざうら提灯ていとう下さげて出いで往ゆきへ通とほ
遠ちがひの粹まろみらんう後見送あとまわつて侍ざうらが田舎いなかの渡わたアさんと
云いふ者ものの詰つまら移うつ入いる身みと入いるヨ此このまア雨あめの降ふり居ゐ

るのよ弁べんしてどんぐり寒さむくあり最ひら少せうその焚き付つと燃くて
衣類きりを乾ぬしやせうと枯葉かれはを取とり火ひ入いるれば発たり燃も立た
焰のの光ひり下くだ思おもはず娘むすめと侍ざうらの面おもてとん合せあ合あ梅うめさん
ぢやア移うつ入いるうつらん又また貴君あなたのう吉太郎きちたろうさん侍ざうら何様いかにも
と根ねる声こゑどと思おもつと折をりく表おもてを往ゆく人ひとが唄うたひるがら
ふ通とほる都みやこ々々
つれの夕ゆふアと降ふる春雨はるさめ濡ぬれ見みる気きよあり易やすい
娘むすめを助たすけ侍ざうらの渡わた辺べ吉太郎きちたろうと云いふ者ものふて美男びなんの雪ゆきえ

有るのそあらず歳二十一なれども剣法は精一きとめて
お 有るのそあらず歳二十一なれども剣法は精一きとめて
けんぼう 神奈川の定番役とあり横濱不在勤す娘の中村源三
かみがら 神奈川の定番役とあり横濱不在勤す娘の中村源三
おやちんやく 流しと噂ふ入の子にて歳十八容貞の美しきものそあらず
よこたま 流しと噂ふ入の子にて歳十八容貞の美しきものそあらず
おきざり 心ざらぬも優は勝れ吉太郎といふ幼稚よりの手習朋輩
あきらみき あり又農家の老婆は吉太郎の家み久しく下婢と勤
まごのうら めり老まらち寂とま梅が中み如何なる話の出来るや
うめり 第四編は説くころと見覧あはんとは異ふ
ごん 春雨文庫三編下の巻終

関明 第四編より 近世の烈婦孝女乃傳説を
 小説 引續き出版 記し面白き珍書なり

松村春輔編輯 初編より 出版
 復古夢物語 八編まで 出版
この 這ハ明治太平記の前篇みて毒水
この 六年西米利が使節相州浦賀へ来ぬ
この 以来明治元年伏見戦争迄委しく
この 考るる面白き書也

和田定節編輯 半紙本 初編より七篇 此書西国征討の始末を詳細に
 参考鹿兒島新誌 迄全部十五冊 考るる第一の實録なり

東京書肆 大島屋 弥左エ門町上ニ番地
 武田傳右衛門

010190509473

